

## ブラジルにおけるカルデシズムの展開

19世紀半ばにカルデシズムが移植される少し前、ブラジルの上流階層ではフランツ・アノン・メスメルが説く動物磁気による病気治療への関心がすでに共有されていた。例えば1853年発行のリオデジャネイロ市の新聞でメスメリズムが宣伝され、1860年には『イエスとメスメル』という新聞も刊行されるようになっていく。メスメリズムの信奉者たちは、イエスをこれまでに存在した偉大な磁気学者と見做し、彼を超えたい霊媒師として位置づけた。彼らはイエスのように手をかざすことによって人を治癒することのできる能力に憧れていたという。カルデシズムは霊の世界を説く教理で人々の関心を呼んだが、手かざしによる「治療法」も大きな魅力だった (Vol.15 No.4 参照)。

エリート層の人びとにカルデシズムが広まり始めると、民衆層のあいだでも受容者が増えていった。その背景の一つに隣国パラグアイとの戦争 (1864～70) があった。戦争によって経済状況が悪化し社会問題が増加した。日常生活の苦しみから逃れようとする人びとは、カトリックよりも即時的な救済を得られるカルデシズムに救いを求めるようになっていった。

1865年にはバイーア州サルバドール市にカルデシズムの拠点である心霊主義家族グループ (Grupo Familiar do Espiritismo) が設立された。この地域ではカルデシズムが爆発的に進展したが、それは他の地域の比較にならないほどだった。サルバドール市は1763年までブラジルの首都が置かれ、政治経済の中心として機能していたため富裕層が多かった。またサトウキビプランテーションで働く黒人奴隷の人口比率が高かったことからアフリカ系宗教による心霊主義的な影響も強かった。このような政治経済的、そして宗教的環境がヨーロッパから移植された新しい心霊主義を受容する土壌となった。

1866年には聖典である『聖霊の書』の一部が『霊性主義哲学』 (Filosofia espiritualista) として翻訳された。このことはカルデシズムが識字層 (中・上流層) の間で広がっていたことを物語っている。バイーア大司教のマヌエウ・ジョアキンは、すぐさま教書を発表し、カルデシズムは輪廻転生の思想や降霊を説いていると批判した。

当時、霊の憑依を信じることは黒人の低俗な迷信であると理解される傾向が強かった。しかし、カルデシスタ (カルデシズムの信奉者) らの活動により、そのような認識に変化がみられるようになった。従来、降霊は奴隷小屋や暗闇の通りで行われ、黒人の呪術的な儀礼だと見做されていた。しかし、カルデシスタらによって富裕層の大邸宅でも降霊会が行われるようになっていったのである。

1871年、カルデシズムでは国家の公認を目指す動きが見られた。8月にはバイーア州副知事あてに活動許可を申請し、ブラジル・エスピリタ協会 (Sociedade Espírita Brasileira) の設立を願い出た。帝国憲法第5条ではカトリシズム以外の宗教について、家庭内で、あるいは個人の範囲内での活動を許可するとしていた。しかし、カルデシズムに認可は下りなかった。1860年12月19日に制定された法令2.711で、新たな宗教の

設立には大司教の認可を必要とすることが定められており、かつてカルデシズムの動きを危険視したマヌエル・ジョアキン大司教がそれを許可しなかったのである。実は申請者らは、認可が受けやすいようにと定款には協会を「文芸・慈善団体」として記していた。あえて「宗教」という表記を避けたのである。しかし、そのような努力は徒労だった。現在でもエスピリタたちの中には、カルデシズムを宗教だと明言しない者がいる。多くの場合、そのような人々は哲学であり科学だと説明するが、この頃から看取される偏見のまなざしがなくなったわけではない。

この後、ブラジルのカルデシズムの中心はリオデジャネイロ市に移ることになる。1873年8月3日、同市に最初のカルデシズムの協会となる心霊研究協会 (Sociedade de Estudos Espíritas) が生まれた。それ以降、活動はブラジル全土に拡がるようになった。ブラジルのカルデシズムの黎明期といえる1870年代から80年代にかけて、入会者にはフリーメーソンが多かったとされる。

ブラジルでカルデシズムを広めた権威者の一人として知られるベゼハ・デ・メネゼス (1831～1900) は、「フリーメーソンはブラジルではエスピリティズモ (カルデシズム) のもっとも熱心な推進力である」と語った。彼はセアラ州出身だがリオデジャネイロ市議会議員となり、共和主義者で奴隷制度廃止論者だった。医者でもある彼は、1986年にリオデジャネイロ市の著名人たちの前でカルデシスタであることを公言したとされ、メンタルヘルスの領域にカルデシズムによる治療を導入したことでも知られる。彼のように心霊主義者で奴隷解放運動に参画するものは多く、ブラジルの政治的・社会的変動期にあつて、同じ改革派の仲間としてフリーメーソンや共和主義者らと接触していた。

1888年に奴隷制度が廃止され、翌年には帝政から共和政に移行した。新たな国家建設に向けて動き始めたブラジルでは、近代的な法制度が準備されるようになった。たとえば、1891年に制定された憲法では政教を分離してカトリシズムが国家の公認宗教としての地位を失った。また、1890年に制定された刑法では156条から158条に公衆衛生にかかわる条文が記されている。カルデシズムのブラジルにおける展開において興味深いのは、代替治療として用いられていた、ホメオパシー、動物磁気はその条文のなかで禁止されたということである。それらの手段は、カルデシズムやアフロブラジリアン宗教に看取されるものである。つまり、刑法の条文はそれら二つの宗教の心霊主義的な活動を反近代的だとして阻止するものだったといえる。

しかしながら、この刑法による取り締まりの対象になったのはアフロブラジリアン宗教だけだった。共和政を導いた人たちにとってブラジルをヨーロッパ的な近代国家に仕立て上げることは緊急の課題だった。アフリカの文化を遅れたものとみなす一方で、ヨーロッパから移入されたものを不快に感じない権力者は、カルデシズムを排斥の対象にしなかったのである。そして「白人」の心霊主義には、社会的・政治的に力を持った軍隊の将官や国家の役人などが通うようになっていた。